

第3期第12回生涯学習センター運営協議会 議事要旨

〔日 時〕2017年7月21日（金）10:00～12:00

〔場 所〕生涯学習センター 調理実習室

〔出席者〕※敬称略

委員：岩本 陽児、太田 まゆみ、大野 浩子、白崎 好邦、島田 忠次、陶山 慎治
辰巳 厚子、中里 静江、中村 香、前田 美幸、柳沼 恵一
以上 11名

事務局：板橋センター長、加藤担当課長、小林管理係長、松田事業係長、齊藤主任（記録）

〔欠席者〕上村 まり

〔傍聴人〕2人

〔資 料〕

- ・各委員の意見（第11回運営協議会議事要旨案より）（資料1）
- ・第13回生涯学習センター運営協議会 上半期事業報告資料 イメージ（資料2）
- ・（仮称）町田市教育プラン（2019年度～2023年度）（資料3）
- ・次期教育プラン策定スケジュール（資料4）
- ・2018年度まちだ市民大学HATSの準備について（資料5）
- ・まちだ市民大学HATSプログラム委員選任要項（改正案）（資料6）
- ・第八回町田市生涯学習審議会 委員メモ（資料7）
- ・委員の意見（当日資料）
- ・具体的な事業や施策について（柳沼会長）（当日資料）

会 長：今回は、生涯学習センターの役割を「あるべき姿」、機能を「具体的な手立て」と定義して、「あるべき姿」について委員の方々のそれぞれの考えを述べていただいた。それを抽出して（A）～（E）にグルーピングしてまとめたものが（資料1）の（A）地域の課題を解決する学習（B）地域の人材を生かす（C）地域の組織をつなぐ（D）市民に愛されるコンシェルジュ（E）地域の中で学校を育てる、である。そこで先ず本日の話し合いを始める前に、同様の議論が生涯学習審議会でもなされており、影響力も大きく、こちらを抜きには議論出来ないのでは、レジメの報告事項（3）を先に副会長よりご報告いただく。

3. 報告事項

（3）町田市生涯学習審議会の議論について

委 員：それではお手元の（資料7）を参考にご説明いたしたい。生涯学習審議会でも問題になっているのは、町田市公共施設再編計画である。公共施設の多くは1980年代に建てられたもので老朽化が進んでいる。今後人口が減少し、税収が伸び悩んでいく中で、今のうちに計画を作らなくてはならないという全庁的な動きがある。外部委員が委嘱されて会議が開かれている。見直しの対象となる施設の6割が学校だが、社会教育に関しては図書館があり、文学館という非常にユニークな図書博物館としての施設は、数年前の事業仕分けを受け、その結果が独り歩きしているという懸念がある。町田市の公共施設の再編について、6月15日～7月18日まで市民意見の募集がなされた。これに対し、生涯学習審議会でもいかに戦略的に意味のある、効果的な対案を出していけるかどうかを議論している。ここでのポイントとして、社会教育・生涯学習というのは、社会教育法に基づき、国や地方公共団体の責務として市民の学習権を保障するというミッションが与えられている。他の市の施設と一緒にたにされては困るということは声を上げていかなければならない。市の職員においては、たまたま配属されたかもしれないが、この社会教育のミッションについてきちんとご理解いただき、組織的に情報を共有されたい。特に生涯学習センターへの期待として、福祉や住民の生活に関わって、学んだ人の成果が地域に活かされるような接続を考

えてはどうか、というご意見を頂いている。もう一つ、「人材」という言葉について。墓石は石材、家は木材で作るわけだが、教育に関わる者として、人を材料扱いするのは如何なものかと、以前から生涯学習審議会でも申ししており、生涯学習審議会では「財（たから）」という意味を当てた「人財」としている。

会 長：公共施設再編計画については各地で説明会が開かれ、私も7月7日の市庁舎で行われた説明会に参加した。ホームページ等各委員がそれぞれご覧になって一市民の立場で考えていただきたい。

委 員：どのような内容であったか、感想等を伺いたい。

会 長：約50%が小中学校の建替えの問題である。今後10年～20年間の間に建替える中で、単に建替えるのではなく、複合化のようなことも考えられている。生涯学習の活動や障がい者をはじめ、いろいろな人が訪れることが出来るような場にしてはどうかということを考えている。もう一度10月に具体的案が提示されると思う。

委 員：複合化という言葉が多用されているが、ハードではなくソフト面も含めてなのか。

会 長：一つの建物が提供できるサービスは、今は一つだが、建物の中にいくつかのサービスや機能を提供することを複合化という。市民センターのガラス越しの向こうに図書館があり、その脇に高齢者のカフェがあったり、学校の中にこうした施設があったりといったイメージの例示はあったが、具体的にその学校が決まっているわけではない。従来あったサービスがなくなり、どこかでその機能が別な形で提供される仕組みが必要ということである。この議論は尽きない。学習権の保障は大切にしていかなければいけないし、福祉を中心とした支援や、シルバー人材センターや社会福祉協議会等との提携が大切である。

では資料1から考えたい。一応5つにまとめたが、これに対するご意見も含め、各委員がこうあって欲しいというイメージに対し具体的にどうすれば実現できるのかということについて、生涯学習センターとしてやれる範囲はあるが、どのような方策があるかを皆様に出していただきたい。

○委員意見

委 員：生涯学習に対する目的や期待感というのは、地域の課題を共有して解決を図っていくことが大前提であるということ踏まえた上で、社会課題というのは常に変化しているので、その変化を取り上げるべきだと考える。ことぶき大学も市民大学も講座の内容に変化が無く硬直的になっている。2025年問題は一つの例示として申し上げた。また、介護や医療面の問題や、一億総活躍社会の中で、我々がどう生きていくのか、あるいは多文化共生社会と言われるが、定住外国人との共生社会について我々はどうか対処するか、といったような課題について学ぶべきではないか、ということである。政治経済分野も抜きに考えることはできないので、それらも加えたほうが良い。ことぶき大学と市民大学の統合について、実際に両方受講してみて、違いが分からない。受講年齢層も内容も同じようなものだ。補助金だけの問題ならば、一緒にまとめて、「市民大学」も「明日の町田を考える会～市民大学～」といったように「共に学ぶ」というニュアンスを持たせ、親しみやすい名称にしたほうが良い。市民大学とことぶき大学を統合した場合の調整方法として、2階建て構造にして1階部分にHATSやことぶき大学の内容を、2階部分に「地域づくり」といった内容を持つてくるのはどうか。

・参加者数を増やすというのは重要な問題だが、データベース化が有効ではないか。例えばアンケートでメールアドレスを収集し、こちらから誘いをかけてリピーターを呼ぶなど、技術的な工夫で解決できないだろうか。eラーニングの活用も今や世の中で一般的なもので、予算やマンパワーについての課題はあるだろうが、一つの手段となる。

・最近「町田の福祉」を受講した。最終回に話合いの場があったが、大部分の人がボランティア等の希望を持っている。なぜ彼らが出て来られないかということ、入口がよくわからないのではないか。修了団体は44あるようだが、その活動内容をホームページ等でPRして呼びかけるなどしてはどうか。

・生涯学習としての人財育成といった場合、どういう活動分野の人財を育てようとしているのかを明確化すべきではないか。社会福祉協議会に、あるいは国際交流センターに任せる部分、生涯

学習センターが育成する部分を明確にし、それに対応する具体的な講座も必要であるとする。

・「介護支援ボランティア制度」を事例として提示したい。ボランティア活動した人にポイントをつけて活用できる制度を稲城市で始めたらしく、300市町村で採用しているという事例が興味深い。

委員：町田市でも「いきいきポイント制度」というのがある。

(委員からの発言が相次いだため、整理する)

○町田市の「いきいきポイント制度」について

65才以上の市民の方が、市内の介護保険施設等でボランティア活動を行った場合に「ポイント」を集めることができ、次年度に商品券等へ交換できる仕組み。(ホームページより)

- ・65歳以上に限られ、元気高齢者が活躍する。介護以外の分野も選べる。
- ・社会福祉協議会が運用し、高齢福祉課の財源で行っている。
- ・手帳にスタンプを集める仕組みで、2時間で5ポイント。1年間ポイント取得の上限は5000ポイント(5000円分の商品券等)。
- ・地域振興にからめて商工会議所で還元を行ったところ、還元できる店舗が限られ人気がなく、商品券等で交換できるようになった。

○ボランティアについて

- ・全国的にもポイント式のボランティア制度はあり、自分が将来使えるものや、地方の老親に送れるものもある。生協が行っているケースも多い。
- ・ポイントをいざ還元しようとした際、還元できる事業所がなく、ポイントが全国的にたまっており、制度として行き詰っている現状がある。
- ・ポイント制にすると、楽しんで貯めることができる。
- ・ボランティアは有償のほうが良い。お互い責任感も出て継続化する。
- ・最近では交通費やお昼代、資料代等の実費は支払わないとボランティアが集まらない。

(委員の意見続き)

委員：コーディネーターの養成講座は以前にもあったと思う。何が問題で機能していないのかを洗い出すべき。養成講座を行うのであれば、コーディネーターとして地域で働いていただく前提で講座を設けた方が活動として機能すると思う。コンシェルジュについては、まず窓口を明るくすること。一つの方法として、学生コンペティション等を活用した窓口のリノベーションを行ってはどうだろうか。若い人に来てもらうきっかけになると思う。予算の範囲でどのような事が出来るかを考えてもらえば、学生の経営等について学ぶきっかけにもなり波及効果もある。窓口には、有償で市民目線のコンシェルジュを配置すると良い。現状の窓口体制はどのようなものであるか。

センター長：窓口は2つあって、シルバー人材センターには部屋の貸し出し部分をお願いし、職員が1人交代で団体登録のご案内や相談にあたる。シルバー人材センターには、月1回の休み以外は昼間2人、夜間3人体制で、部屋の貸出業務だけではなく、施設の管理も含めて委託をしている。

委員：シルバー人材・社協・生涯学習・NPO等いろいろな母体があるので、それらの横のつながりによって情報共有出来ると良い。

会長：コーディネーターの活躍の場まで考え、出口を用意し、実際の活動につなげていくという意見が出たが、このところについてご意見ありませんか。生涯学習センターがどこまでやるのかということはあると思うが。

委員：生涯学習コーディネーター養成講座はどのようなことをやっていたのか。活躍の場にはつながらなかったのか。

会長：現在も活躍されている。2回ほど「生涯学習コーディネーター養成講座」を行ったが、その後、修了生たちによって「生涯学習コーディネーターの会」、現在は「NPO法人市民活動コーディネーターの会」に発展した。

委員：現在どのような活動をされているか。

委員：大きく2つ。市民が関心をもつ「市民塾」という講座を2か月に1回主にフォーラムで開催している。もう一つは、各団体の交流の場を設定する検討を現在している。2年前にNPO法人になり、まちだ広報にも掲載され、まちカフェの出店にも関わっている。

委員：公共施設の統廃合や、まちだのシティプロモーションなど政策のあり方を学習する、「まちだ未来を考える会」に参加させていただいた。「町田の文化を考える」というテーマだったが、皆さんものすごく熱心で、図書館や文学館の方、こどもの遊び場の方等の実際活動されている方が集まって議論されていた。生涯学習センターに関わっている方はいなかった。以前、市民協働推進課で地域の人材育成の講座をやらせてもらったとき、シルバー人材センターは本当にすごいと感じた。シルバー人材センターでも、ことぶきのような講座を沢山やっていて、人材も沢山いることを知り、ここ以外でもかなりの動きがある事を知り、この会議にも様々な分野の方が集まっはいるが、ここ（生涯学習センター）だけで地域課題を解決する学習とは何かを考えるのは狭いと感じた。地域課題を解決しなくてはいけないということは、共通認識ではあるが、生涯学習センターでやるべきことをもっと洗い出すべきだと思う。ここだけで考えていても、生涯学習センターとは何なのかが、宙に浮いてしまう感じがする。

・つながりを作ると書いたが、生涯学習センターにもっと遊び心があってもいいと思う。例えば「写真を撮る」という講座。最初はカルチャーセンターでやれば良いのではないかと思ったが、写真を通じた地域活動の成功例を全国で聞いてみると、最初は「皆の笑顔を上手に撮ろう」という講座で、最初は「自分の子供の顔を可愛く撮ろう」というきっかけで参加したが、せつかくのその技術を、「市民の笑顔や対話している姿を撮ろう」、「老人ホームに行って撮ってみよう」といった活動につながる例もあるので、否定するものではなく、「町田の魅力を撮ろう」とすれば、町田の魅力を引き出すということにつながっていくと思うので、「集う」というところにもう少し工夫があってもよい、そのことによってつながりを作っていくという方法があってもいいと思った。

・出口をこちらで用意すべきかどうかについて、2つあると思う。卒業後はご自由にという方法と、参加した人が例えば必ず何等かの介護福祉にかかわる活動をしなくてはいけない、という風に出口を明確にして、1回は具体的に形にするよう支援するという方法。継続すると市からお金が出る。アクティブラーニングとは少し違うが。

会長：出口をちゃんと用意するべき？

委員：そういう意味ではない。自分たちでやるというのはかなり難しく、学び方がかなり違う。やり方やノウハウを繰り返し教えていく必要がある。

会長：自分で新しい事業を立ち上げるというのは難しいが、ある団体に参加して学んだことを活かすのであれば抵抗がないのでは。

委員：既にあるところに入っていくのは、もちろん、やり方としてはそれも良いが、そうではなく、やはり自分で新しくやってみることが大切。そのためのプログラムがある。

会長：皆やりたいと思っているが、つながっていないので、出口を用意したらというご指摘があったが。

委員：予備軍は沢山いるが、どうきっかけをつかむのか、入り口はどこにあるのか、どういう活動対象があるのかということわからないでいる。

委員：出口という部分では、生涯学習センターだけではなく、市役所の各部署等で、こういう人材が欲しい、こういう支援を市民にして欲しい、というのが最初にないと、しっかりとした出口を用意するのは難しい。

委員：ただ、せつかく修了団体が44団体、現在活動しているのだから、具体的にどういう活動をしているのかホームページ等で情報を公開して、結び付けていく方法もあると思う。福祉の講座では振り返りの会に参加したが、ほぼ全員集まったが、実際に活動している団体の人の経験談や、活動の紹介をすることはなく、受講者の自己紹介の中で、実際に自分は今活動をしているとか、活動したいという希望は持っている、という話が出るだけ。修了団体については冊子が配られるだけで、特別にそれについて触れるということはない。どうぞ記録をお読みくださいというだけ。

委員：実際に行動するまでは気持ちはあっても、次の段階に行くのはハードルが高い。日が経つと、せつかくの気持ちも流れてしまう。「インターンシップ制度」を導入し、講座の最後に地域活動を行っている団体や、NPO団体等に実際に行き活動してみる期間を設けることも一つの方法だと思う。

会長：出口を示すという話も出ていましたが、市民大学の卒業生として、環境の団体でご尽力なさっているお立場としてのご意見をいただけますか。

委員：まず、市民大学のやり方を抜本的に変えた方が良いと考える。

・先日人間科学の講座を受講した。修了生との振り返りを一昨日19日に行ったが、10人程度しか集まらず、振り返って何をやったかというだけで、何かをどこかで立ち上げようという話になるわけでもない。何のために集まったかわからなかった。また今度会いましょうという程度で終わってしまった。

・本当は去年あたりから市民大学の講座を変えないと、という発想があったと思う。25年経ち、出来た当時と現在では状況は全く変わってきている。人も変わり、政治経済も変わっている。全く同じものをやっていたのでは意味がない。「あなたを励ます」ということは、自分の知識を得ることでとても楽しいが、今の市民大学は地域に対しては何も還元出来ていないのではないだろうか。昔は、環境講座であれば、環境団体をいくつか呼んで各ブースを設けた。今はそれもなく、講座を受けた後の窓口はない。市民大学をなぜ作ったのか、基本に戻って考え、将来的に市民のためになるような講座を作って欲しい。

・地域のリーダーの養成講座、コミュニケーションの方法や、地域の方の人材を生かす方法について、一つ講座として設けてみたらどうか。

・ボランティアの養成講座を一つ銘打って、その中で環境や福祉や子供の支援について考える仕組みをつくり、後のフォローをしっかりとすれば、講座自体が生きてくるのではないだろうか。

・若者を取り込むには、大学生が何を望んでいるのかを把握し、「若者の為の講座」を市民大学の講座として設けてはどうか。

・歴史講座についても、様々な面（景観、地質、焼き物等など）からの歴史の見方があると思う。

・ボランティア情報は1か所に集約し発信する場をつくり、そこに行けば、ボランティアの種類や窓口がわかるようにした方がよい。

・市民大学とことぶき大学は同様な事業を行っているので、整理しなくてはいけないと思う。また、シルバー人材センターや市民塾でも同様の事業を行っている。良い人材は一杯いるので連携したほうが良い。

会長：市民大学とことぶき大学の問題意識は私も持っていて、私なりに考えた具体論を提示したい。具体的な事業や施策について（当日資料より）

・地域の人材を生かす・・・実行計画「市民大学の検証と再構築」に関連して、市民大学に「まちだ総合大学」をつくってはどうか。目的は、町田について理解を深め、地域で活躍できるよう、必要な知識・技術を高め、地域社会で主体的に活動できる人材を育成する。学習機関は3年間で1年ごとの進級制とする。定員を1学年100名とし、運営は各学年の受講生が主体的に進める。

委員：具体的ですね。

会長：中野区でも同様のことを行っていて、なかの生涯学習大学（旧ことぶき大学）では年間21回の講座のうち3分の1出席したら進級できる。定員1学年200名（3学年制）だが、学年の運営は受講生が自主的に進める。今の市民大学はバラバラに始まってバラバラに終わるが、オリエンテーションの形式で一同に会して行く。初めと終わりをちゃんとやろうということで、開校式と修了式にはちょっとしたイベントをやりたい。町田ゆかりの文化人を呼んで講演会を行い、修了証も形骸化してしまっているが、修了式は受講生が企画して成果発表なども行ってはどうか。

順番が回ってきたので、私からも生涯学習センターの機能としての具体的な事業や施策に関して、市民大学以外の部分について述べたい。

・地域の組織をつなぐ・・・「市内の連携体制強化」として、シルバー人材や社協や文化交流センター、商工会議所等の生の声を聞く必要があるので、緊密に情報交換を行う。

・地域の課題を解決する・・・「まちチャレ」のように、地域の課題解決につながるような講座を地域で開催する。地域で行ったほうが、地域住民の協力が得られると思う。将来的には独立していく。まずは地域の中で事業をおこして地域の住民の協力が得られるようになったら、その結果を踏まえて他の地域に増やして全市域に広める

・コンシェルジュ・・・インターネットの活用やすさがまちコンソーシアムの協力を得て、さがま

ちの学生さんのアイデアを生かし、インターネットの活用や、市内の多くのNPO等の情報を集めて一般に提供していくといったことを行う。

委員：学習した人が地域に出ていくにはどうすればよいかという意見で、出された意見の他に、私は、学習を終えた後の「つながりの仕組み」が必要だと考える。誰がやるかというところでは、職員であるとか、ボランティアでコンシェルジュが出来る人を登録制で用意するなどして、受講生をサポートする仕組み。コーディネーター養成講座の中で講師の先生は「学んだ後あなたには何ができますか」と考えさせた。一年先輩の方がミルクの会を立ち上げた。卒業した後、次の学習につなげるような講座についての案内も大切。コンシェルジュがフォローをしていくということと同時に、受講生に対してはコンシェルジュを積極的に相談・活用するように案内する。

会長：コンシェルジュは座っているだけではない、ということですね。

委員：生涯学習センターは他団体と連携したほうが良い。また、必ずしも長生きが幸せの全てではなく、いかに人々が地域と関われるかを念頭に現在活動している。

・「鶴川地域レポーター つるレポ」の活動について（当日資料より）。鶴川で生まれ育った高校生、大学生の意見を聞きながら、未来の鶴川をどんな風にしていきたいかをスマートフォンで意見を収集する。月1回の3水スマイルラウンジでスマホ教室をやると高齢者がどっと押し寄せるので、高齢者にもスマホは有効だと感じている。鶴川地域レポーター養成講座を生涯学習センターとコラボで3回の連続講座を行ったところ、現在地域レポーターは40名に増えた。お出かけ中に「気付き」をレポートしてもらう。鶴川の問題だけでなく、「ここが好き」とか、「こんな人がいる」とか、イベントの案内等を伝える。町田市の道路や公園、河川等の各セクションにつなぐ。スマートフォンで頂いた写真は地区協議会のホームページやFacebook（フェイスブック）に一度我々のフィルターを通してからアップする。レポーターはサポーターにもなってもらいたいという話をされていて、「ガバメント2.0」というような、地域住民が参加して行政を動かしていくというところまで発展させたい。地域で支え合う仕組みづくりが出来ればと思う。例えば、近所でお困りの人がいたら、写真をメールで送ってもらい、誰かが助けに行くという仕組みが作りたい。

・生涯学習センターが他団体とつながる必要があると考えている。月1回の3水スマイルラウンジに来てもらっているが、社協やシルバー人材センター等も来てくれている。オール町田で様々な団体がつながるのは難しいが、まず一度、地域でつながってみる。

・「地域支え連絡会」を高齢者支援課が主体で行わなくてはいけないが、これに生涯学習センターが関わってもらいたい。「在宅介護支援センター」は、13年前に地域包括支援センターに替わった。町田市は高齢者支援センターとなっていて高齢者だけが関わるイメージが出来上がっているが、そもそも厚労省としては共生社会を進める上で、子育て世代や障がい者も含めることを想定している。そこで「地域支え連絡会」をつくることになった。町田でどう高齢者や障がい者や子育て世代をどう地域で支えていくかを考える。この連絡会に生涯学習センターも関わっていただけると良い。生涯学習センターの職員にも地域担当がいると良い。地区協議会でもコーディネーターしてくれる人が3人いるが、社協やハローワークや商工会議所と顔が繋がっている。チャンネルは増やしていく必要がある。生涯学習センターで養成したコーディネーターも生涯学習センターとしかつながっていないのでは機能しない。オール町田でつなげることは難しいから、まずは地域ごとに始めてはどうだろうか。

委員：利用を伸ばすためにはどうすれば良いかという点について。市民大学等の講座はテーマをはっきり持った方がよい。子育ての講座等では、外に出て体験する機会を設けるなど、参加者のニーズにあった講座をつくるとよい。養成講座を受けても、出口も職の紹介もないとなると、何の利用価値もなく、受講する意味がない。その辺のシステムが明確だと参加者が増えると思う。

・ボランティアを受ける現場はとても大変である。来てもらっても何もやることがなかったとなると、次に来てもらえなくなるし、印象が悪くなる。担当者をきちんと置き、仕事を用意し、すべて調整してそれに臨むということである。ボランティアを受ける団体も、どういうところにど

れだけの人が必要かということをしちんと学習し、このような交流会の中で情報交換をした方がよい。

委員：地域ごとというのはとても大切だと思う。地域に生涯学習センターの拠点があった方がいい。拠点として考えられるのは教育委員会系の施設では学校だと思う。

・生涯学習センターでコーディネーターを養成しているところはあるけれども、現実問題としてコーディネーターというのは、実際にやっている人の中から育つものなので、養成するのは難しいと思う。

・川崎市では市長の公約で予算をつけ、学校ごとに寺子屋を作り、イベントや色々な学習機会を大人が設け、子供たちも学び、大人達も寺子屋を通してつながっていく、これは一つの良い例である。

・拠点として、福祉系の施設では、地域包括支援センターもある。

・この大きな町田全体を生涯学習センター1つで担うのは難しい。生涯学習センターでは、連絡協議会のようなものを行ってはどうか。

委員：全くその通りだと思う。町田は大きい。生涯学習センターとして統括することと、平和祈念事業など、ここでやるべきことに特化するなど、役割を根底から考え直すべき時に来ているのではないか。

・地域ごとというのは良いが、強力なリーダーがどこの地域にもいれば良いが。

委員：中学校・小学校をどうするかは、卒業生を中心に話し合うといい。地域への強い思い入れがある。中学校区に1つ生涯学習センターの拠点を入れると良い。学校が出来て50年程経つので、卒業生の中には余裕のある人がいる。

委員：鶴川地区協議会という予算があるところで活動しているところが良い。南大谷小学校は住所が南大谷だが、学区は玉川学園、南大谷、成瀬、高ヶ坂に地区がまたいでいて課題も地区ごとに違ってしまう。センターの担当を地区ごとに置くのは良い考えだ。

・学校ボランティアはニーズがあってから動く。保護者から講座の要望があると、人材の確保をして、対象学年を調整する。学校の時間割は限られる中で時間を割いて、ニーズがないとつなげないし、ニーズがあっても、そもそもニーズに合った人がいないのか、手段がないのか、活かさない。誰に頼むかということ、結局は人脈である。

委員：多くのボランティアバンクが失敗した背景には、名簿に名前を羅列して、こんなことが出来るといわれても、初めての人になかなか頼めないということがある。

委員：面識がなくてもつながられるのは、大学の教授からの学生さん。あるいは経験者で、実際に受け入れた人にリサーチしてからである。

委員：大学の先生側としても、知っているところでないと受け入れを頼めない。

会長：最後に、〇〇先生からお願いいたします。

委員：1つは「出」をどうするか。その中で、福祉と出来ればつながると良いということ。もう1つは、生涯学習センターと近隣の商店街とのつながりはどうなっているのだろうか、ということ。

・「出」を考える上では、例えば大学の受験生案内パンフレットにも就職先という「出」が紹介されているように、「出」を示すことが必要だ。サークルではその中だけで完結してしまうので不十分。今日大きな要請としてあげられているのは、社会教育としてホットスポット的な役割を担える組織の立ち上げが必要だ。

・ボランティアはマネジメントコストがかかるという重要な指摘があった。どういうニーズがあるのか、どのようなスキルが求められているか、コンシェルジュや地域担当という話も出たが、何が必要とされていて、そのためにどのような講座をつくるかをこまめに考えていくことが大切。オール町田ではなく地域レベルという指摘も出た。

・有償ボランティアが有効であるという指摘は、日本におけるボランティアに対する考え方の成熟を感じる。無償のボランティアは、長く続くと発言権が強くなる。実費を出すということが大

切。

- ・会社の帳簿がつけられるような人に地域を学んでもらって、スキルを生かす形で活躍出来る場があると良い。
- ・社会教育の全国集会在相模大野で開催される。是非お越しいただきたい。図書館分科会の世話人をいたします。その他各開催事業のご案内について。

会 長：次回は事業報告を行うので、その方法について事務局より報告されたい。

事務局：上半期事業の全体が見える形での事業報告シートA3資料3枚程度でご報告させていただきたい。

会 長：次回の日程調整について。9月20日（水）の2時～4時、10月30日（月）は午前10時～12時でお願いいたします。

3. 報告事項

（1）センター長報告

センター長：第2期目の教育プランは来年で終わるので、2019年度から5年間の計画を今年度と再来年度をかけて検討していく。他部署と庁内の各計画との整合性を取りながら、生涯学習審議会のご意見を頂きながら、町田市教育プラン策定検討委員会と、3つの作業部会で進める。生涯学習推進計画も並行して、別途検討していく。

- ・市民大学について、問題がいろいろあって、内容の検討まで至らなかったが、来年度に関しては、今までとあまり変わらない形をお願いする。引き続きご意見を頂きたい。喫緊の問題として、プログラム委員の更新時期となるので、その変更点についてご説明したい。

（2）2018年度まちだ市民大学HATSの準備について（資料5～6）

事務局：市民大学については2019年度プログラムについては大きく変更することは出来ず、陶芸教室を除くその他は実施する予定である。大きな変更点として、プログラム委員について、11月末が委員の任期であるので、選考方法について変更する。環境と自然については一本化する。工夫した点について。選任にあたっては、修了者団体の方で、互選していただく。修了者については2回までの更新で、最長3年。プログラム委員の人数については最大10人だったのを5人以内。修了者については2人とさせていただく。

会 長：決定ですか。

事務局：改正案についても、（案）とはなっているが、これで進めさせていただく。

委 員：結果ありきの会のようだ。環境と自然の委員は一緒にする？

事務局：参加希望者が多いので、2017年度は自然のプログラム委員については任期が終了し、以降更新をしないということです。19年度以降のプログラムについて環境のプログラム委員にやるかやらないかを含め検討をお願いします。

委 員：プログラム委員を減らすということは、事業が減るのか。

事務局：同じだが、来年度予算が減る可能性もある。

委 員：新旧対照表で示していただき良かった。

会 長：いろいろご意見があるようなので、別途話合いの場を設けてはどうか。

事務局：別の組織をつくるという意見については、実際に難しく議論する場を作れなかった。

委 員：市民大学の改革については一昨年から話し合っている。何のための報告書だったか。去年の繰り返しに見えるが。「市民大学が何を指すのか」という「軸」がブレてきたので、プログラム委員もプログラムを作れず、結局繰り返しになっている点が問題になっていた。毎回、「市民大学が何を指すのか」ということに対して毎回発言も出ているのに、それらは吸い上げられなかったのか。大きな改変は出来ないとしても、これだけ「地域活動」と言われている中で、試験的に一つ講座を別途設けるなど、何かしらの変化を付けることが出来たのでは。

事務局：市民大学の改革については、第2期の話合いで、「提言」をいただいた。第3期のセンター運営協議会で別に話合いの組織を設けることが話し合われたが、人選等の点で組織化が出来なかった。2018年度については、12月からプログラム会議が始まるので、現段階では、プログラム委

員をどのように選出し委嘱するのかというポイントに絞って内部で議論を進めてきた。

センター長：2018年度のプログラムを大きく変えるのは時間的に難しいため、ご理解いただきたい。

委員：1年以上待つことになる。

事務局：事業を運営しながら考えていかなければならない。

委員：プログラム委員が変わるときに変更するのはタイミングが良いと思ったが。

会長：今後の改革を確認したので、今年度は無理ということだが、次年度以降の市民大学のプログラムに向けて是非反映してもらおうということで、次回の9月20日にも十分議論いたしたい。

(3) 前出の通り。

(4) 東京都公民館連絡協議会の活動について

委員：①第1回委員部会研修が9月2日(土)に開催される。テーマは「公民館の役割とは何か」。講師は永田浩三氏に決まった。パンフレットは各市に配信した。

②第2回委員部会研修について。研修会の進め方は、第2回で打ち合わせ通りに、1回・2回の連続した形で実施。事例発表を聞いて、講師と助言者について検討中。

③第54回東京都公民館研究大会について。大会のメインテーマは「東京の公民館の未来」～持続可能な地域、次世代の学びにむけて～(案)が決まった。次回の企画委員会で確定する。課題別集会は昨年1月開催と同程度で4つの分科会を設けることで各担当を協議中。